



TITLE:

加賀國大聖寺河口砂丘地域の研究

AUTHOR(S):

小牧, 實繁

CITATION:

小牧, 實繁. 加賀國大聖寺河口砂丘地域の研究. 地球 1935, 23(4): 258-269

ISSUE DATE:

1935-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184412>

RIGHT:

加賀國大聖寺河口砂丘地域の研究

小 牧 實 繁

本稿は昭和九年十月筆者自らの行つた實地踏査を經としその後遂行し得た文献上の研究を緯として經め上げたものである。本地域は延長僅かに五軒を超えぬ小範圍を出でぬものであり且つその砂丘も必ずしも純粹の砂丘とは稱することを得ないが、それにも拘らず尙ほ興味ある研究の對象たるを失はぬ。即ち茲にこの小篇を綴つて世の地理學愛好家の參考に資せんとする所以である。若し幸にして本稿に一瞥を賜はらんとする博雅の士あらば、何卒五萬分一地形圖「大聖寺」「三國」の兩圖幅を参照せられんことを乞ふ。

大聖寺町の西北、下福田より片野に通ずる道路が平野の水田面から上つて丘陵の隧道に入る地點に於いて觀察するに、下福田の水田面北方の丘陵は凝灰岩よりなる。殊に前記隧道に於いて最も明瞭な凝灰岩の露頭を見る。この凝灰岩の丘陵が道を隔てて西南更に犬ノ澤の方まで延びてゐることは、地形並びに植物相の上から略確實である。

隧道を抜け坂道を下ると再び水田面が開けるが、この水田面は細長く東北の方向に入り込んでゐる。片野の東南に五萬分一地形圖に鴨獵地と記されてゐる池があるが、⁽¹⁾上記の水田面が嘗てこの沼澤と連續する一回地であつたことには疑の餘地がない。而して上記池の水は細流となつて片野聚落の南方に於いて海に注いでゐるが、上記水田面及び鴨獵地の沼澤が嘗て砂丘背後の潟をなしてゐた

ことも充分推測し得るところである。⁽²⁾

片野北方の丘陵は明かに純粹の砂丘ではない。併し砂を被つてゐることも事實である。そして松を生じてゐる。

片野聚落⁽³⁾の南方、氏神八幡神社の鎮座する丘陵も基盤は凝灰岩よりなるが一部分砂を被つてゐる。この砂は瀬海の砂丘砂よりは若干古いやうに思はれるが確言は出来ない。

片野の海岸に出ると片野北方丘陵の基盤をなす凝灰岩が直接海波の侵蝕に暴されてゐる。⁽⁴⁾片野北方の丘陵が純粹の砂丘でなく凝灰岩の丘陵が砂を被つたに過ぎないことは全く確實である。

片野の西南に長者屋敷趾といふのがあり、五萬分一地形圖にも明瞭に記載されてゐるが、片野の人達も良く認識して居り、此處からは石鏃や瓦などが出ると言つてゐる。⁽⁵⁾瓦と言ふのは祝部土器などのことと思はれるが、兎に角遺物の出ることを認めてゐる。此處にも海岸に凝灰岩の露頭が見られる。これも上部は砂を被つてゐるが、その垂直的側面に於ける露頭は最も明瞭である。この附近例へばその北方少許の地點には今尚ほ彌生式及び祝部式土器破片の包含層が認められるから、以前此處から多くの遺物の發見せられたことは疑ふことができぬ。筆者は小包含層の斷面より若干の彌生式及び祝部式土器破片の外に鐵屑を發見した。

片野より大聖寺川河口に至る海岸に於いて基盤露頭の認められるのは唯この長者屋敷趾に於いてのみである。これは大いに意義のあることで、此の地點が先史、原史時代當海岸に於ける一の特異な地點であつたことが察せられる。

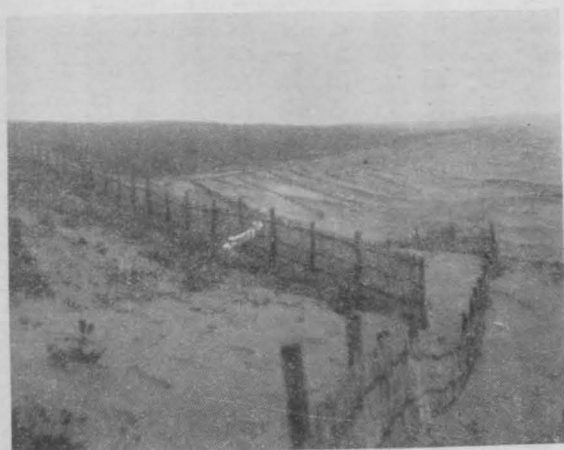
片野より長者屋敷趾に至る、而して長者屋敷趾より大聖寺川河口に至る海岸には砂丘よく發達し、地表面は凡て砂を以て被はれ、基盤岩石の露頭は認められない。長者屋敷趾に於けるが如き基盤岩石は存在するのであらうが、良く砂丘砂に被はれて地表面には現はれてゐないのであらう。

この砂丘に

はその全體に亘つて飛砂防止の施設が認められる。第一圖は片野より



第一圖



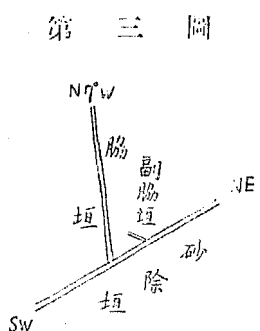
第二圖

ころを示すが、その兩者に葭簀が施されてゐるのを見る。縦に松の杭を立て横に竹をわたしその間

り長者屋敷趾の方向を望んだところを示し、第二圖は長者屋敷趾より西南海岸砂丘を望んだと

に葭簀を挟んだ式のものである。¹⁰⁾

海波の打ち上がる濱の傾斜は一六——一八度であるが此の部分には勿論植物はなく、それから内側は微少な起伏を有するが大體平坦で、その内側に五萬分一地形圖にも示されてゐる第一列前砂丘が存在するのである。これは前砂丘とは言ふが固より人工によるところが多い。飛砂が植物に捕へられて自然の前砂丘が生じたことも考へ得るが、此の前砂丘は主として前記砂除垣により飛砂が妨げられて形成せられたものである。この砂除垣、從つて第一列前砂丘は長者屋敷趾より鹽屋に至るまで海岸線と併行して連續し、尙主砂除垣から北七度西の方向に脇垣を出してをり更にそれに副脇垣（假りにかく稱す）が着けられてゐる。即ち第三圖に示すが如くである。



この副脇垣は南西に進むに従ひその飛砂による埋積の程度が少く瀬越の海岸では漸くそれが見られなくなる。この事實からすれば、大聖寺川河口附近に於いては却て海砂が陸上に打上げられることが少く且飛砂の堆積も少いと斷ぜざるを得ない。

砂除垣による第一列前砂丘の外面には植物が存しない譯ではない。オニシバ、コウボウムギ、ハマニガナ、ハマヒルガホなどの砂丘植物が存在するし、殊にその稍々小高い小丘をなす部分にはハマゴウ卓越しその他多くの砂丘植物が存在する。この海岸に於いて採集し得た砂丘植物は即ち次表の如きものである。（三木理學士鑑定）

- | | | |
|------|--------|--|
| (1) | オニシバ | <i>Zoisia macrostachya</i> Fr. et Sav. |
| (2) | コウボウムギ | <i>Carex kobomugi</i> . |
| (3) | ハマニガナ | <i>Lactuca repens</i> , Maxim. |
| (4) | ハマヒルガホ | <i>Calystegia Soldanella</i> , R. Br. |
| (5) | ハマゴウ | <i>Vitex trifolia</i> , L. var. <i>ovata</i> , Makino. |
| (6) | スナデノギク | <i>Heteropappus arenarius</i> Kitam. |
| (7) | ハマサジ | <i>Statice japonica</i> S. et Z. |
| (8) | ウンラン | <i>Linaria japonica</i> Miq. |
| (9) | ハマグルマ | <i>Wedelia prostrata</i> , Hemsl. |
| (10) | カハラヨモギ | <i>Artemisia capillaris</i> , Thunb. |
| (11) | ハマボウフウ | <i>Phellopterus littoralis</i> , Fr. Schm. |

第一列砂除垣の内側にはグミ、アカシア等が植ゑられ、更に内側には一面に松が植栽せられてゐる。即ち第二圖の遠景左寄りに見るが如くである。

瀬越の海岸では更に脇垣すら見られなくなる。これは飛砂の害が少くなるによることは明かであるが、かく飛砂の害が少くなる理由としては二つの場合が考へられると思ふ。第一には前述の如く大聖寺川河口附近では却て海砂の陸上に打上げられることが少いといふこと、第二には瀬越の海岸には砂丘臺地とでも呼び度いやうな地形の發達が海岸近くに見られること即ちこれである。この臺地には既に砂丘植物が多數群落し砂丘はよく固定せられた外觀を呈し、且地表面の起伏は少く實際砂丘臺地とでも呼び度い地形を呈するのであるが、それが移動的ではなく固定的であるのは過去の砂丘固定作業に負ふところであるか、或ひは基盤に岩石を有するためであるか、全く明瞭ではなか、觀てゐる。瀬越には廣海その他の天下の富豪があり、それがこの海岸の砂丘固定飛砂防止をやらなかつた筈なく、また大聖寺川の河口附近には基盤岩石の露頭があり海中の暗岩もあるのであるから、この部分の砂丘下にも、割合に浅いところに基盤岩石の

存在するであらうことは疑ひないところである。

大聖寺川南岸見當山の海に臨むところはまた嶮岸をなし、岩石が露出し、同様河口にも岩石が露出してゐて、それより南西海岸には砂丘の發達が見られない。これは大聖寺川の搬出する土砂が海潮流、瀬岸流により大部分北東に漂積せられることを證するものではあるまいか。尤も土砂が波浪のために打上げられ大聖寺川河口を埋め河水の氾濫を來すことも往々にあり、殊に冬季西北風の時にそのことが多い。河口の河幅を狭め河水を急流せしめ、土砂の搬出を促進せしめ、更に防波堤を築造したりなど相當の施設が見られるのであるが、土砂による河口の堰塞は往々にして惹起せられるのである。

鹽屋村より瀬越村⁽¹⁾を経て上木出村⁽¹⁰⁾、上木本村に至るまで、水田面上の丘陵は凡て砂丘である。基盤には、殊に鹽屋に於いては、基盤に岩石があるのであらうとは思はれるが、その露頭は見られず、全部砂丘砂に被はれてゐる。殊に鹽屋、瀬越間の砂丘が大聖寺川流路に臨むところでは砂丘風下側が略模式的に三〇度許の砂丘風下側斜面の傾斜を呈してゐる部分が見られ、而して一面砂丘らしく松樹を以て植林せられてゐる。

然るに上木本村の東北、犬ノ澤の南方に至ると、道路に臨む丘陵の突角に凝灰岩の露頭が認められ、前記の地形と植相とからの推測の妥當であつたことを證するのである。この凝灰岩の露頭には龜が穿たれ其處に地藏を祀つてゐるが、この丘陵はまた部分的には安山岩のブロックを包有する集塊岩よりなつてゐる。これより前記、下福田の丘陵に至るまで同様の地形と植相とが見られ、この部

分が凝灰岩乃至はそれと關係ある岩石よりなることは殆んど疑ひの餘地がない。

最後に享和三年頃の著作と考へられる⁽¹²⁾菱惣紀聞の記事を引いて當時本海岸砂丘地域の景觀並びにそれ以前に於ける景觀變化の一斑を知るの一助ともしよう。

片野 村より中濱の海端の臺に、長者屋敷（小牧註、五萬分一地形圖に長者屋敷趾を載す）といふあり。昔長者住居したる跡といふ。此の邊昔鹽竈ありしと。此の長者屋敷邊矢の根石あり。今は甚稀なり。昔は大池の上砂山と片野村前の山と、よほど隔りて、此の所に大池より流るる小川ありしとぞ。其の後年々砂押出し、川埋り流も絶え、中坂（小牧註、片野より下福田に通ずる坂道ならん）の下迄も池になり居たる山。依て今の掘抜御普請ありて、村前へ流る。御普請ありしは百五、六十年許以前（小牧註、享和三年より逆算すれば延寶六年は一五五年以前なり）の事と、片野のものいへり。又昔は今の砂山の所一圓檜木林なりしに、或時木と木とすれ合ひ出火して、不殘燒失すと云ふ。今長者屋敷の邊に、燒木と覺しき木根あり。又大池もめくらが池も、ひとつ池にてありしに、砂押入り埋り、大池とめくらが池は入江の所にて埋り残りたと云。めくらが池の向に栗林ありて、下福田の者舟に乗りて栗落しに行き賣りたると、村の古き咄しありといふものあり。今に下福田に栗役とて小物成有。是に符合すれば實なるか定かならず。又一説あり、下福田の條に記す。（菱惣紀聞、昭和六年石川縣圖書館協會複製本、五頁）

上木 昔福田川此の領の砂山の下を流る。下福田領にも川田とてあり。此れ古川跡なり。其の比の川の様子を尋ね問ふに、川へ高く砂入りて、川あせ、渡り越す所もありたりとぞ。水田には土居切れて、田地損ずる時々あり。今田の中に所々にくろろあり、其の比田地に砂入りたるを片付けたるくろろなりといふ、古き咄し聞き傳ふる山所の者いへり。定かならず。また此の領に次郎七かまやといふ所あり。木村の海手深き谷なり。昔は此の邊檜林なりしとぞ。其の後も此の谷は木々生ひ茂り、村の小童などは化物用づるとてゆかさざりしと云ふ。今は一圓砂押出し、いにしへの形はなし。また苗代谷とて本村の手前なり。此の谷昔は百ヶ池の方へつゞく小砂坂の下手に堤あり。此の邊の苗代此の堤の水を引きたる由。其の比は風除の松林ありたりとぞ。本村の田の中に大神の宮あり。大水の節浮きあがると云ふ。（中略）北陸道拔書云。敷地（小牧註、大聖寺の東北）上木、河岸、瓜生、深町諸兵進出遮其來路とあり。めくらが池の西の臺を城跡と云ふ。昔は土居、堀切もありと。今は大かた砂に隠れしと。今も畑中に少しは土居の形あり。並木の松もあり。夫より村の方の臺に寺ありしといふ。今たま／＼瓦の缺など掘出す事ありといふ。（菱惣紀聞、昭和六年石川縣圖書館協會複製本、一一―一二頁）

下福田 昔は此の領内に大なる澤あり。狼常に住む故に犬の澤（小牧註、今、福田村に犬之澤の地名あり、また沼あり）と云とぞ。又犬の澤に昔浪人居住し、常に生栗を貯へ御用を勤む。數年立ちて御用を斷りし時より、此の栗の料として下福田村に栗役とてありとぞ。定かならず。（菱惣紀聞、同、二二―二三頁）

鹽屋 川を隔て加嶋（小牧註、鹿嶋山）の森あり。吉崎より湖の内に加嶋道あり、昔はなし。此の邊を蛇嶋といふ。昔は一圓湖にて嶋二つあり。御鷹嶋と云ひし山。昔鹽屋と潮越（小牧註、鹽屋の東）との間わづかならでなく、潮越の御藏上木（小牧註、潮越の東北）の方の村端にありしに、年々砂押出し、潮越道も砂に埋もり、寛政年中追々鹽屋村端へ家を引く。近年は鹽屋の方の村端へ御藏建替あり。また加嶋も水戸の方嶋根に砂原出來たり。是等も近比迄なし。嶋根にわに松とてあり。此の下昔は淵なりしに、いつしか砂原となる。潮越前より水戸迄の川筋、一林六尺許もあせたりと、兩浦（小牧註、鹽屋、潮越兩浦）のものいへり。水戸の向海中に、八丈ヶ岩とてあり。波高き時は見えず。往古此の所往還なりしと云ひ傳ふ。（菱惣紀聞、同二三頁）

菱惣紀聞の如上の記事から吾々は當地海岸砂丘地域に古來、地形・水理・植物・聚落・道路、その他文化地物に於ける幾多の變化、一言にして蔽へば幾多景觀上の推移變遷があつたことを推測し得る。ただこれを精密、正確に地圖上に圖示し得るが如き程度に確知することを得ないのは遺憾であるが、何れにしてもそれが主として海蝕と砂丘砂の侵入飛來とによるものであることは殆んど異論の餘地が無い。該砂丘砂の侵入に動因を與へたものが謂ふ所の如き森林の自然發火であるか否かは遽かに斷言することができないがそれは全然考へ得ないことでもない。

最も興味ある事實は所謂長者屋敷跡なるものが今は荒涼たる砂丘砂の眞只中に突兀として存在することである。これが石器時代乃至は原史時代の遺跡であることには全然疑ひの餘地なく、石器時代より原史時代にかけての地點には恐らく人間が居住し得たものと考へられるが、その後海蝕により海側を侵され、また恐らく當時繁茂してゐたであらう植被もはがれ、更に周圍には砂丘砂の飛來

堆積を見て遂に居住には適しない所となつたのであらう。長者が居住したといふは單なる傳説に過ぎないとしても人が居住し生活し得たことには殆んど疑の餘地なく、古今の盛衰變遷うたた感慨の深いものがある。

〔註〕

①この池は片野の大池と稱せられ、石川縣史、第五編、昭和八年、圖版第一〇四の説明文には「片野の大池 江沼郡黒崎村（小牧註、同書、九頁及び一一〇〇頁によれば、昭和五年一月一日橋立村に併合）片野の東方には大池と稱するものがある。大池の面積は約一〇〇〇アール（小牧註、石川縣史、第五編、六八七頁によれば、一五〇アール）といはれてゐるが、そこに年々早稻を耕作して收穫の後には直に水を湛へ鳬鴨の來遊に便ならしめる。その爲九月から翌年四月に至る間は數萬を算する水禽が池上に群棲する。坂網といふのはこの鴨を捕へる爲にこの地方で行はれる方法である。」と言ひ、同書圖版第一〇五に坂網の寫眞を掲げ、それに就いての説明を載せ、なほ同書、六八七頁には坂網に就いて詳しい説明を與へてゐる。

②石川縣史、第二編、昭和三年、一四三五頁に

延寶六年利明（小牧註、大聖寺藩第二世前田利明）又内膳（小牧註、老臣神谷内膳）をして片野村の山腰に隧道を通じ、大池（小牧註、片野大池）の潒水を海に導きて水位を低下せしめ、その沿岸に美田を得。

片野の大池 江沼志稿に「往昔村前の山と砂山との間に大池より流るる川ありと雖、没して砂山と成り、池水次第に溢る。延寶六年堀貫御普請有て、村の向勘定ヶ谷へ大池の水落、池高新開有」とあるもの即ちこれである。

とあり、加能越三州地理志稿、卷二、江沼郡、山川の部、石川縣圖書館協會複刻本、二一頁に
片野池 在北濱片野村南頭。方可百間。導池水。歷片野村達海。又有小池。相去近矣。長四十間。幅二十八九間許。とある。

③加能越三州地理志稿、石川縣圖書館協會、昭和九年複刻本、二〇頁、卷二、江沼郡村里の部に 吉崎、鹽屋、瀬越、上木、田村、下福川、山岸、片野の名が出てゐる。この書の原本は同書校訂者日置謙氏の解説によれば文政十三年の著作にかかるとのことである。

あるが、片野の聚落が文政十三年以前のものであることは勿論である。

④加能越三州地理志稿、卷二、江沼郡、山川の部、石川縣圖書館協會複製本二一頁に

牛鼻白巖 在本郡片野村濱海十餘町。白石壁五十數俵。皆爲海潮所浸。劈爲對立四五丈。卻間僅通人。上頭不合纔一二尺。其向海處。陵夷爲漁磯。可坐數十人。沈底多岩石。出頭激濤。側生海苔。海人出沒驚濤中。採海苔榮螺爲業。問土人無他生產。

とあり、同書、卷二、江沼郡、土産の部、石川縣圖書館協會複製本、二三―二十四頁に

稚海濱 片野村、黑崎村多田。淡青色者最佳。黑苔 片野村、黑崎村海中多生。海蘊 片野村、黑崎村田。松露 日末村、

片野村田。

とある。

⑤北陸人類學會志、第二編、明治三十一年、一〇―三四頁に○北陸地方遺物遺跡表を載せ、その一六頁に

江沼郡片野村海濱丘 石磯 清水沖一郎發(見)

とあり、石川縣史、第五編、昭和八年、九七二頁に

江沼郡橋立村片野より南西方越前との國境に至る間は、砂丘能く發達すれども、その中に黒土を露出する所ありて、屢々石器を發見し得べし。又片野部落の南方なる長者屋敷といふは、粘土質(小牧註、實際は凝灰岩なり)の斷崖海に迫りて、頂上に平地地を有する所なるが、小砂利(小牧註、小牧踏査の際そのうちに玉髓及び蛇紋岩の小礫を採集し得たり)の中より石磯破片及び石屑を出ししことあり。明治二十四・五年の頃、山代溫泉なる山下氏が片野の海岸に遊びて石磯を採集したりと報告せるも、亦この附近なりしなるべし。

とあり、既に發見紀聞(石川縣圖書館協會複製本、五頁)にも

村(片野)より中濱の海端の臺に長者屋敷といふあり。昔長者住居したる跡といふ。此の長者屋敷邊矢の根石あり。今は甚稀なり。

とある。

⑥この地海岸砂丘飛砂防止施設の歴史に就いては拙稿、本邦海岸砂丘固定作業史の斷片、地理論叢、第三輯、昭和九年、一六四―一七三頁參照のこと。なほ最近の砂防造林については、石川縣史、第四編、昭和六年、九四六頁に、

江沼郡福田村上木外三ヶ村に跨る二百八十四町歩の砂漠地は(中略)大正元年度以降十五ヶ年に完成の目的を以て、砂防造林

を實施することとせり。(小牧註、大聖寺小林區署、大聖寺事業區の事業としてなり)とあるのを補記し度い。

⑦日本水路誌、第四卷、明治四十年六月第一改版、四一六頁に

大聖寺川 河口ハ狹隘ニシテ水淺ク且河口ノ北方約五鏈ニ夥多ノ暗岩アルヲ以テ云々
とあり、既に越前國名蹟考、卷之十二、日置謙校訂本、一〇一六頁に

曲江水口 黒子岩 水戸口廣き拾貳間半東は加州鹽屋浦西は濱坂浦の濱なり深き壹丈水戸口に黒子岩あり濱坂(小牧註、越前國坂井郡北湯村濱坂)の分なり

とあり、また同書、一〇二七頁に

濱坂浦吉崎浦船繋自由雖有之水底岩多水戸口狹而船難入順風之時米百二十石積之船水戸口出入有之 北國浦潮汐盈虛無之とある。

⑧土屋義休著、大澤君山重修、加越能大路水經、卷上、石川縣圖書館協會、昭和六年復刻本、一頁に

川(小牧註、敷地川即ち大聖寺川)末吉崎湯は加州越前入合の所也。湖中に島あり、鹿島と云。大正持(小牧註、寺の誤ならん)領なり。五十年已前七面明神を祭る。

とあり、(重修加越能大路水經の最初の姿のものは加越能三州山川記といひ正徳四年若しくはそれに近い年に完成したものである。これに就いては同書復刻本三一頁、日置謙氏の解説を参照のこと)鹿島のことには加越能三州地理志稿、卷二、

江沼郡、山川の部、石川縣圖書館協會復刻本、二一頁に

鹿島 在本郡鹽屋吉崎西。港口置小祠。

とある。

⑨重修加越能大路水經に

敷地川大日川山中川 本名大日川ト云中ニテハ山中川下ニテハ敷地川也川末吉崎湯ハ加州越前入合ノ處也湖中ニ嶋アリ鹿島ト云東ノ山ノ根ニ加州吉崎越前吉崎ト云二村アリ僅カニ小川ヲ兩國ノ堺トス水戸淺キ故ニ大船ハ不入流水ユルキ故水口折々波ニテ砂ヲ打ヨセ埋ル事アリ

とあり、(重修加越能大路水經は、石川縣立金澤圖書館所藏本に就いて見るに、石川郡御供田村、土屋義休著、同郡増泉村大澤

君山重修にかかり、その奥書に、正徳四甲午歲君山識、享保二十一丙辰重修とある。重修加越能大路水經、石川縣圖書館協會複製本、二頁には

此川（小牧註、敷地川即ち大聖寺川）の湊を堀切といふ。水戸淺き故に大船は入らず。百石計積む小船は入る。流水ゆるき故に、水戸口せつ／＼浪にて砂を打寄せ埋る事あり。水戸口常に舟渡也。
とある。

⑩加能越三州地理志稿、卷二、江沼郡、官舎の部、石川縣圖書館協會複製本、二三頁に
米倉所 大聖寺、鹽屋村。
とある。

⑪加能越三州地理志稿、卷二、江沼郡、關梁の部、石川縣圖書館協會複製本、二三頁に
瀬越渡 在本郡南頭。通吉崎村。置舟。

とあり、同書卷二、江沼郡、製造の部、石川縣圖書館協會複製本、二四頁に
瀬越村造。以上三種（小牧註、象筭、鏡、蒸饅、饅頭）大聖寺府君充于江都之貢物。
とある。

⑫菱薺紀聞、昭和六年石川縣圖書館協會複製本、二九頁に於いて、校訂者日置謙氏は、同書の著作年代は、享和三年の序文があることより凡そその頃と定めて差圖がないと言はれる。

附記 本研究は帝國學士院の補助に負ふところが大である。銘記して深く感謝の意を表する。